

スローライフ・フォーラム in 青森実行委員会御中

**「スローライフ・フォーラム in 青森」
開催に伴うコーディネート等業務
— 報告書 —**

特定非営利活動法人スローライフ・ジャパン

1 概要

- ・開催日：平成26年1月25日（土）・26日（日）
- ・場 所：「フェスティバルシティ アウガ」、「ねぶたの家 ワ・ラッセ」、「青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸」、青森市街
- ・主 催：スローライフ・フォーラム in 青森実行委員会
- ・協 力：スローライフ学会
- ・参加者：のべ約600人
- ・内 容：

<1月25日（土）>

- 市内視察
- オープニング
- 分科会
- 交流会

<1月26日（日）>

- 全体会議
- 市内視察

<1月25日（土）～26日（日）>

- 逸村逸品展・市民活動展

※すべて敬称略
※すべて要約

2 フォーラム内容

1) オープニング

- ・日 時：1月25日（土）14時～15時
- ・会 場：「フェスティバルシティ アウガ」5階男女共同参画プラザ
- ・参加者：280人
- ・内 容：
「スローライフ・フォーラム in 青森」実行委員会実行委員長・青森市長 鹿内博、青森市男女共同参画プラザ館長 白石壽美枝からの挨拶のあと、「オープニング・トーク」が行われた。会場を笑いの渦に巻き込みながらも、方言をモチーフに迫力のある地域論が展開された。
- ・テーマ：「この町を好きになるために」
- ・講演者：伊奈かつぺい（津軽弁の日やるべし会代表）



「青森の場所がわからない人が多い、秋田や岩手などと一緒になる。そのくらい東北の地理を理解している人が少ない。

青森は、4つの海に囲まれていて海の幸が豊かだ。太平洋、日本海、津軽海峡、陸奥湾、と。リンゴの生産は日本一。

ただ、長寿ではないという統計もある。

他所に行くと青森は本当にいいところだという話をする。祭りは青森のねぶたが一番。ねぶたは極彩色、皆が踊ったり跳ねたり引っ張ったり参加できる。有名でも見るだけの他の祭りとは違う。最近「ワ・ラッセ」に飾ってあり、いつでも出したいときに出せる。

方言の話を。辞書には、「い」と「え」、「し」と「す」、「じ」と「ず」がはっきりしないのがズーズー弁、東北弁、とある。「だからどうした？」と思う。「いとえを混同して何が悪いか？」と。この辺の人は点々がつけるのが好きで、気持ちがいい。

「ウシ」ではなく「ベゴ」。「ウシ」ではいやなのだ。

例えば「い」にも点を付ける。濁った発音で「い」だけでも話ができる。あいづちの基本形は「い〜」、なんですか？という疑問形は「い〜」、理解形も「い〜」で、すべて通じる。「い」に点を付ける文字などは青森の新聞社でも使っていると思う。独自のものをつくっていかなくては。

清音、濁音、鼻濁音・半濁音というのがある。歌などではこれが使われている。津軽、リンゴなど、歌に出てくる「が」や「ご」がもし普通の濁音だったら感じが違う。半濁音で歌ったからヒットした。半濁音はやさしい響きになる。

あえて言えばこれが正しい、日本語だ。方言は荷物にならないので持ち帰ってほしい』

2) 分科会

- ・日 時：1月25日（土）15時30分～18時
- ・会 場：「ねぶたの家 ワ・ラッセ」1階 交流学習室1・2、2階ホール
- ・参加者：雪分科会54人、祭り分科会26人、方言分科会47人
- ・内 容：

各分科会とも、地元の方を中心に活動の事例発表があり、市外からのパネリストが専門分野から意見を重ね、コーディネーターが抽出した論点を議論した。会場からも意見をうかがう進行とした。

各分科会会場はそのテーマを具体的に連想させる、装飾や設え、音楽などが工夫された。

①「雪」を活用したまちづくり分科会

- | | |
|----------|---------------------------|
| コーディネーター | 坪井ゆづる（朝日新聞東北復興取材センター長） |
| パネリスト | 木村 宏（一般社団法人信州いいやま観光局事務局長） |
| | 早野 透（桜美林大学教授） |
| | 奈良秀則（あおもり雪国懇談会会長） |
| | 堤 静子（NPO 法人あおもりみなとクラブ監事） |
| | 伊香佳子（青森市中心商店街女性部事務局長） |



[奈良] 青森市の経済界での活動を紹介。国土交通省の冬期バリアフリー計画の一環で歩道の融雪化が進んだことをきっかけに、青森では雪国懇談会という組織がさまざまな活動を行っている。メンバーは40~50人。雪対策を行政に任せっぱなしにするのではなく、市民レベルでの意識を変えていくための啓蒙啓発的なことを中心に、バス停にスコップを置いて自主的に除雪するような活動も。誰も管理していないが1本のスコップも紛失していない。

[堤] 4年前から行われている「青森灯りと紙のページェント」というイベントを紹介。狙いは、港の八甲田丸までのアプローチをにぎやかにすること。「夏の自慢のねぶた」と「冬の自慢の雪」をコラボして何かできないかと、ねぶた師にも相談して企画。雪だるまの形で和紙を貼って作ったオブジェを並べていくもの、ねぶたと同じ手法でねぶた師に教わりながら子供たちに絵を描いてもらう。「冬でも楽しいことを…」と考えたイベント。4年目となる今年はその数が600個に達して市民の人たちにも周知できた。

[伊香] 青森ならではの豊富な冬資源に感謝して、まずはできることをやってみようと、女性たちで始めた活動を紹介。商店街の店に立つ私たちが、観光客の方々からの質問に答えられなかったことがきっかけ。「青森の顔でもある私たちが対応できないのはまずい」と考えて、身の丈に合った規模でのイベントを企画。「アップルパイコンテスト」「りんごバレンタイン」「鍋横綱コンテスト」…。雪や寒さなどの本質に逆らうのではなく、吹雪にぶつかればしのぐことを、また寒いなら暖かいものを、そして美味しいもの、安くていろいろなものがあればうれしい。あるものを受け入れて活かす、というあたりまえのことをやって

ここまできた。

[木村]——手掛けてきた様々な体験事業を紹介。メニューは 354 種類、冬は雪のイベントを提供。ゼロ泊から 15 泊まで。内容は同じでも枕言葉をつけるだけで集客できることがある。「カップラーメンを 10 倍美味しく食べるスノーシューツアー」とか「誰にも会わないスノーシューツアー」などの例を紹介。当たらないこともあるが、ちょっとした工夫が必要だと思う。トレイルコースを整備したり、雪の上でマウンテンバイクをやったり、スノーキャロットも作っている。外国人向けのツアーも。新幹線が開通することを踏まえて着地型商品の企画や駅での情報発信をどうするか、なども考えている。

[早野] “北緯 40 度（秋田県八郎潟）を超えているところでも、天然のダムである雪や豊かな水資源を活かせば工業地帯として発展することができる” という田中角栄の言葉を紹介。——パネリストの意見も踏まえながら、「時代は変わってきたと感じている」として、克雪の時代（ハードな条件整備）から親雪（ソフトな付き合い方を考えている）へと変わりつつあるという見解を述べた。

——コーディネーターの進行で——

雪を活かした商品開発についても論議も出たが、パネリストの意見はむしろ、青森に足を運んでもらうには、雪にまつわる物語をアピールしてはどうか、ここでしかないものをどう見せていくかという知恵、あるいは本物を体験できる仕掛け・仕組みづくりが大事ではないか、という意見が続いた。

会場からは。青森市の NPO 職員は「雪（邪魔なもの）の活用は、ライフスタイルを変えるとといった入口から考えていかなければいけない。厄介ものだという感覚ではなく、青森の雪はこれだけ素晴らしい、という感覚を市民レベルまで浸透していったから、青森にお客さんに来てもらう…こういう流れにならないといけないのではないか」と指摘。また経済人から、「きれいごとを言い過ぎている。本当は違う。懇談会の前身は商工会議所の雪対策委員会。除排雪をどうするかという論議は繰り返し出てくる。行政のバックアップも必要だ。青森は 100 年経っても雪は降る」という意見が出た。

対策とか啓蒙啓発という話ではなく、また民間か公共という線引きで物事を考えるのでもない。別の公共精神みたいな意識を持たなければいけないのではないかと。雪に関するまちづくりでは、なかなかいい解決方法はないが、違った形でプラスに転じていかなければならない。人間の根本的な生き方にかかわっていくようなことでもあるような気がしている。と締め言葉があった。

②「祭り」を活用したまちづくり分科会

コーディネーター 丸岡一直（社会福祉法人ニツ井ふくし会理事長）
パネリスト 山下 茂（明治大学公共政策大学院教授）
神崎宣武（民俗学者、旅の文化研究所所長）
今村 孝（青森観光コンベンション協会ねぶたガイド隊副隊長）
高杉忠詔（篠田町ねぶた実行委員会委員長）
室谷昭廣（青森市高田獅子踊保存会会長）



[今村]今日の私の衣装は「覚様（おべさま）」の法被。津軽の文化で「見たふり・聞いたふり・覚えたふり」を「三ふり」というが、覚えたふりでガイドをしている。祭り前に多くの人をガイドしている。見所は5月から街中にできる22戸もの製作小屋で、7月中は組み立て現場の見学がお勧め。ねぶたは世界に誇れる壮大なペーパークラフトだ。しかし、ねぶた師は経済的に恵まれていない。祭りの最大の特徴は誰でも参加できること。しかし、笠をかぶらないなど伝統が失われる側面もある。私達のような無料ガイドを利用し、学校で「ねぶた学」の授業を行うなど、伝統を守りながら130億円もの観光資源を活かしたい。他分野の無料ガイドと、連携したい。

情報を持たない熟年者や個人旅行者が増加しているので、顕在化している各ガイドグループに横串をさしてもっとPRしてほしい。ねぶた師の継承についても不安でだ。

[高杉]——祭りの集合写真で遍歴を追いながら「地域ねぶた」の紹介——。篠田町会でも町内からの寄付で製作した 200 万円弱の予算で毎年運行している。各町内の祭りスタッフが中心となり、町内の子供やお菓子目当てに他地域から集まってくる子供に引かせるねぶた。老若男女が交わる貴重な瞬間だ。また、日本中の他地域でもねぶたは運行している。神奈川県藤沢市では「湘南ねぶた」として地域コミュニティの活性化に一役かっている。運行のノウハウを伝え補助に出向く。本場の青森への誘客にもなっていると思う。

地域ねぶたは我が地域の資源。祭りを支えるゆっくりとした流れが、生きていくための精神的な支えだ。観光資源の大型ねぶたは主催者が気忙しく、ゆとりが無い。それとは一線引いた活動を続けていきたい。

[室谷]高田獅子踊り保存会で猿の面をつけて 32 年間踊っている。踊りと囃子と音頭が一体となる、バランスが大切な郷土芸能で、付近にはこの様な楽団が 6 組あり、競争している。当会は昭和 36 年に無形文化財に登録された。全国で行われる博覧会にも出演している。面などの手入れは、飾羽根が欲しくて自分達で鳥を捕まえたり、私が手作りで頭を作ったりした。「ワ・ラッセ」展示されているのが最高の喜びだ。小学校へも課外講師に出かけている。毎年決まって 8 月 14 日は 40 km 離れた神社へ舞を奉納している。

祭りの期間中に宿となり飲み食いの世話をするのは大変。継承者の娘から集う事の大切さをアドバイスされた。質を求めるばかりではなく、一体となりながら継承してゆきたい。

[神埼]高田獅子踊りの系譜をきちんと整理した方が良い。獅子踊りは京都から北陸へ日本海側を通り、神事としての舞や作法は消えながら、ダイナミックな動きや芸能に発展してここ北の端にたどり着いたようだ。この由来書を今作っておく必要がある。ねぶたは「お殿様に由来する由緒正しき…」を引用して“お国自慢”にしない方が良い。起源説は一つに求めてはいけない。いくつかの要素が重なり発展してきた事を誇るべきだ。ここの風土は神仏と切り離して、皆のエネルギー発散の楽しみとして発展してきた行事である事が貴重。ねぶたの語源「眠気ながし」を大切に是非正しく後世に。

ねぶたは歴史因縁や神仏に囚われない都市型の行事であり、引用を良しとする潔さが必要だ。継承者の問題では、村社会は新しい基軸を出すのは難しいのが現実、都市の大学生の力にも一考を。

また行事には飲み食いが必要。この時にはこの料理といった具合に。それが地域社会を維持する一つの力にもなっている。世界で評価される「和食」は、

四季折々・行事・料理・神と人が一緒に共有し祝う事の一体が伝統文化だとされている。ぜひ飲み食いを。

[山下]1963年の『東北の旅』の冊子が出てきた。修学旅行の手引き書だったようだが、読んでみると戦災後の復興の様子が描かれていた。と考えると、町のハード整備（設備や構造）にも祭りは活かせる地域資源なのだと思う。また、先祖や宗教の背景なく、これほど発展した祭りはむしろ世界に誇れることで、一つの故郷としての要素「自然と人間のやる事の巧み」が成立している。スローライフの観点から言えば、“跳ねられなくなった”高齢者向けにガイドとゆっくり学び味わう様な観光もどうか。

祭りを通して生まれる他地域との交流で郷土愛が育つケースが多い。観光をマネジメントやプランニングする上で女性の視点が必要ではないかと感じた

——コーディネーターの進行で——

地域おこしは常に“新しい攻め”の展開を試みてきたが失敗が多かった。少し立ち止まり、地域の歴史や由緒を紐解く“守り”の展開をすることにより、攻めの一手が見つかるのではないかと感じる、とのコーディネーターの意見。

会場からは。「ねぶたは昭和20年代後半には『青森みなと祭り』の一つだった筈だ。青森中心部のねぶたはよそものの祭りだと思う」「岩手県から来た。300～400年前を起源にした祭りには天災の犠牲者を弔う祭りが多い」「静岡県浜松市は子供が産まれた事を町内で喜び、伝統技法で作る町内の大凧200枚で凧揚げ合戦をする。見物客には楽しくない祭りだ」「富山県高岡市では町の400年の歴史を誇る『御車山』がある。提灯山をぶつけ合う港の喧嘩祭りもある」

最後に「人間の巧み」が地域づくりの一翼を担っている、の言葉で締めくくられた。

③「方言」を活用したまちづくり分科会

コーディネーター 篠田伸夫（認定NPO法人救急ヘリ病院ネットワーク理事長）

パネリスト 石川義憲（財団法人全国市町村振興協会参与）

野口智子（ゆとり研究所所長）

伊那かっぺい（津軽弁の日やるべし会代表）

一町田 工（三内丸山応援隊長）

福士 昭（青森市観光ボランティアガイド・あおもり街てくガイド）



[伊那] 高木恭蔵さんの命日を「津軽弁の日」とし、俳句・川柳・短歌・詩・体験談の作品を募集してみんなで方言を楽しんでいる。今年で27回目になる。方言を特別に残さなくては、広めなくては、とは考えていない。使う人がいなければ言葉がなくなるのは当然だ。学者が残そうとするとだめになる。明日に伝えていくことは楽しいことの方がいい。「津軽弁の日」で、皆で大笑いしている。家庭で両親が使えば絶対に子どもは使う。単語がなくなってもイントネーションはなくなる。地元の人が大事にすれば方言は残る。身近にあるので大事にしないから残らない。

[一町田] 三内丸山遺跡のガイドをしている。普段通りに津軽弁で案内しているが苦情を言われたことはない。アンケートでも98%は良かったとある。古い道具や遺跡は、自然とどのように向き合ってきたかを工夫してきた知恵も含む。古いものを大事にしていけば、言葉も残っていくのではないか。

昔の教員時代は標準語、津軽弁などと考えてもいなかった。一時期は教育現場で方言は使わないという考えがあった。その後、地域の伝統文化を大事にするということから、方言の授業などをするところもある。

三内丸山遺跡を語るには、学術的なことをきちんと伝えなくてはいけないから標準語でとの考えもあるが、楽しく、興味が膨らむように伝えたい。

[福士] 新幹線が開通した3年前にできたボランティアガイド「青森市ボランティアガイド・あおもり街てくガイド」で活動している。現在27名が登録、ほとんど青森生まれの青森育ちなので、案内にも方言が混ざるが観光客には好評。

お客さんのレベルに合わせて、津軽弁のレベルも使い分けをしている。市場に連れて行き、市場の「かっちゃ」と生きた津軽弁会話を楽しむ。津軽弁がよく似合うスポット・津軽弁が楽しめるスポットがある。身体の部分の呼び方に、この地方独特の言葉がある、図解して説明する。雪道の歩き方も、津軽弁で。アンケートでも、津軽弁はわからないけれどあったかくて、聞いて心地がいいと反応がある。今の若い人は津軽弁をあまり使わないが、残していきたい。

[石川] ドイツ語と津軽弁には濁点が多いなど共通点がある。ドイツ語は英語に近く、最近では英語化が日常化したためドイツ語保護法を作ろうとしたが、人口の6割以上が方言のため成立しなかった。一方、方言クラブができ、デュッセルドルフ弁友の会のモットーはゲーテの「方言は魂の語らいだ」。デュッセルドルフのカーニバルは方言の呼び名「ヘラウ」で定着している。「じえじえじえ」と同じく、発信すれば定着する。好きな人達が楽しんで発信するのが自然で良い方法だ。

[野口] 津軽弁には強烈な特色と心地よさがある。地域資源として大事にしなければもったいない。市町村合併や画一化が進む中で、街も食べものも言葉も同じなら、旅をする必要はない、住人も街を愛せない。方言を伝え商品化していく作業が、商店街や地場産品開発の現場に必要だ。方言がブームになっている。若い人に触れやすく、センス良くやるのが大事だ。方言はその言葉で言わなければすっきりしないということ。そういうことを理解しながら残したい。

——コーディネーターの進行で——

会場から。「方言がとても心地よく、来れば聞ける場があるといい」「雪景色と同じく、津軽弁を楽しみに来た」「パネリスト同士で津軽弁で普通に話してみしてほしい」など。各地からの参加者から、自分のお国ことばの披露もあった。高木恭造の方言詩『まるめろ』を、津軽弁のできないパネリストが読み、一方、津軽弁のできる地元側からの朗読と比べ、その違い、方言のすばらしさに納得する場面も。

方言に対し、市民はどんな態度に関わればよいのか、もっと広めていくべきなのか。という問いかけに、決め手となる答えはなかったものの、コーディネーターからは——。

明治時代、学校教育で言語の統一をしなければ日本の近代化は図れないということで、中央集権主義的に強制的に標準語を作った。しかしいま、時代は全然違う。青森の「あほ・ばか」に相当することばは、大昔の京都弁だったという

ことだ。言語は1年間に1km移動することが実証されている。京都と青森の間は1,000km。1,000年前の言葉が青森に残っているということは記録しておいていい。青森はそういう言葉の宝庫だ。「なまりは国の手形」という言葉もある。なまりはかなり残っていくだろう。津軽弁の心地よさを県外の人も感じている。独特の抑揚が心地よさを担保しているのだろう。生活の中で言葉を使い残っていくという形が一番よい。——との締めがあった。

3) 全体会議

- ・日 時：1月26日（日）9時30分～12時30分
- ・会 場：「ねぶたの家 ワ・ラッセ」2階ホール
- ・参加者：180人

・内 容：

各分「スローライフ・フォーラム in 青森」実行委員会実行委員長・青森市長 鹿内博の挨拶の後、「高田獅子踊り」が。会場が華やかに、清められるような素晴らしい伝統芸能の披露となった。続いて基調講演、パネルディスカッションと続いた。



①基調講演

テーマ：「スローライフ・スローライフ」

講演者：神野直彦（東京大学名誉教授、スローライフ学会学長）

『まず、スローライフ・スローライフを定義し、スローライフの中身にふれながら、最後にスローライフによるまちづくりを考えたい。』

スローライフは1986年、イタリアの片田舎で始まったスローフード運動。これはファストフードを無効にして、長い年月を経て祖先から受け継いできた食生活を大切にしていって、グローバルスタンダードの名のもとに食を画一化していく運動を拒否しようという運動だが、それをフードだけでなく、生活全体まで広げていこうとするのがスローライフ運動だ。

2か月前に奈良でスローライフ学会を開いた時、「パパラギ」という言葉を紹介した。「パパラギ」はサモイの酋長が使った「白い肌をした文明人」のことだ

が、日本人も「パパラギ」が大好きで日本マクドナルドの創業者の藤田田社長は「マクドナルドのハンバーガーとポテトを千年にわたって食べ続ければ、日本人の背は高くなり、肌は白くなり、髪はブロンドになるだろう」という言葉を吐き、日本人はみんなそこに走って行った。

風邪薬に間違えて炭酸を入れたら、なんだ飲めるじゃないかと思ったコカ・コーラを飲まされて、私たち日本人の食ばかりでなくライフスタイルも崩し始めた。

これに対して日本でもスローライフ運動が起こった。2001年にスローライフ学会の会長である増田寛也・当時の岩手県知事が、「頑張らない宣言」をする。東北は遅れている地方だといわれているが、価値観を転換し発想を逆転すれば、日本のあるべき美しい姿を引きついで、限りない可能性を秘めた地域が東北地域だ。“ないものねだりではなく、あるものを再発見し、それを地域発展のビジョンにしていこう”。これが頑張らない宣言だった。

●スローライフは伝承の生活

そのようにスローライフを定義し、青森をはじめとする東北地方で雪に抱かれた生活・スローライフを、スローライフに引きつけて定義し直すと、“伝承の生活”、伝わり・伝える未来をスローライフと定義できる。

なぜスローライフを伝承の生活というのか。青森市の『雪のまち通信』の編集者・杉山陸子さんが送ってくれた書物を読むと、水蒸気は通常液体化してから個体になるが、水蒸気が一気に昇華して個体になったのが雪だと解説している。中で、世界でもっとも偉大な雪の研究者・中谷宇吉郎先生は“雪は天から送られた手紙だ”と定義した。この場合、天から送られた手紙の中身は何なのかというと、中谷先生が主として想定されたのは、——日本人は「天」に神々と同時に祖先を重ね合わせるから、雪は祖先から送られてきた手紙だ——と考えておきたいと思う。

雪は不思議で、雪の結晶は太陽光線を一様に反射させてしまう。太陽光線をすべて反射してしまう状態を私たちは



「白」と呼ぶ。「白」は穢れがないものとして位置づけている。東アジアでは人間は生まれながらにして善人であるという性善説を採っている。だから「白」が人間古来の色だと考えている。

人間の生活にはケ（日常）とハレ（非日常）があるが、ハレの時には白を着る。無垢の白装束を着るのが東アジアの考え方だ。したがって花嫁は白装束、黄泉の国への旅立ちも白装束、お祝いの日に駆けつける晴れ着も白装束だった。韓国、中国、ベトナムも葬式はみな白装束だった。

ところが日本では「パパラギ」になりたいのと関係があるが、明治30年ころの皇族の死に際して、ヨーロッパの要人が黒を着てきたので、黒に変えてしまった。養老律令で天皇は喪に服するときには黒い服とあり、天皇および上流階級が黒を着たことがなかったわけではないが、一貫して日本の民衆は白を着ていた。現在は、いわば、欲深く腹黒い黒の色をハレの日に着ることになった。伝統的なものを捨て去った。

スノーライフの中身だが、人間の生活のケとハレの生活の中で、日常の行動を伝えるのが方言言語だとすれば、ハレを伝えるものは祭りだ。ケとハレが方言と祭りに対応している。祭りは神々（＝自然、祖先）と交流する営み。祭りの時には神々と交流するために人間同士があらゆる職業の相違を乗り越えて人々が互いに絆を作りながら、準備していく。それが祭りで一番重要なこと。



ねぶた祭りはいろいろ説があるようだが、七夕と関係があるらしい。七夕は水神を迎える行事だが、仏教が入ってお盆を迎える作業でもある。だから精霊流しがついている。ねぶた祭りは夏の厳しい労働の中で襲い来る眠気を覚ますことと結びついたと思っている。

宮本常一先生の話によれば、市民全体が作っていく下からの祭りと上からの祭りがあり、ねぶたは下からの祭りだろう。東京の神田祭りなど東京には下からの祭りはない。城下町は下からの祭りが少なくなるが、城下町でないところは支配者に見せる祭りでなくてもよいから、というように、祭りにも違いがある。自ら参加して楽しむ下からの祭りと、参加せずに見に行き観客として楽しむのと、二つの祭りがあるが、私たちがこれから楽しむべきは、参加して楽しむ社会になっていくだろう。

●モノではなく、体験する動的なブランドづくりを

スノーライフによるまちづくりはどのようなまちづくりかという、今回採り上げる方言と祭り、そして雪は、モノではないという特色がある。方言も祭りも形がない無形のもの。雪は触れるからモノだということかもしれないが、学術上は雪は舞っている状態を指し、積もったものは積雪で、厳密には雪とは言わない。雪が舞っている状態はさまざま変わり、とらえどころがない。だからスノーライフは体験するものだし、体験することしかできない。

金で交換するものはロクでもないものが多い。いわば、スローライフの逸品は単にモノとしてお金と交換するものではなく、その背後にある人間関係を意識してつくったものでないと逸品と呼ばないのと同じだ。

体験をブランド化すると体験するほかない。音楽でいえば演奏家と観客が一体になって作る体験。体験すると何度も音楽会に行きたくなる。雪の体験をブランド化するとしょっちゅう行きたくなり、ついには住み続けたい欲望になってくるのが起こる。

このように考えると有形なモノによるまちづくりは、モノを持つことによって満たされることをねらっている。モノを持つ所有欲求が満たされると、人は豊かさを実感することができる。ところが人間と人間とのふれあい、人間と自然とのふれあいの存在欲求が満たされると、人は幸福を感じることができる。

世界はGNP（Gross National Product）からGNH（Gross National Happiness）へと舵を切っていこうとするときに、この東北のスノーライフには新しい価値が見いだされてくると思う。司馬遼太郎が「青森は北のまほろば」といったが、青森は「国のまほろば」といい。祖先から長年培われたものを開花していくこと、静的ではなく体験する動的なブランドづくりが、スノーライフによるまちづくりではないかと思う』

②パネルディスカッション

コーディネーター	増田寛也（野村総合研究所顧問）
パネリスト	神野直彦（東京大学名誉教授）
	早野 透（桜美林大学教授）
	神崎宜彦（民俗学者、旅の文化研究所所長）
	野口智子（ゆとり研究所所長）
	鹿内 博（青森市長、スローライフ・フォーラム in 青森 実行委員長）



[増田]私は岩手県知事をしていたので、青森市にはたびたび来た。1月の青森市内は雪の壁の印象だったが、昨日は雨で雪が少なく拍子抜けの感があった。市民の皆さんもびっくりしているのではないか。会場にはねぶたの一部や灯ろうが飾られ、テーブルにリンゴや果物が置かれ、青森らしい中で議論ができてうれしい。

昨日は雪、方言、祭りと3つの分科会があった。はじめに昨日の議論をそれぞれの分科会の代表に報告をしてもらいたい。

[早野]「雪を活用した街づくり分科会」には市外からの参加者がコーディネーターを含め3名、市内からの参加者3名が参加した。司会の杉山さんが1931年にマイナス24.5度を記録し、1945年に209cmの積雪があったとの話題を出した。30万人規模の都市であり、雪の暮らしが延々と続いているこの青森で暮らすことはどういうことか。経済界の奈良さんはバリアフリーのまちをどうつくるのか、除雪費41億円、交通の確保の現実などの克雪の話をした。堤さんは冬感動プロジェクトの話で、市民が絵を描いた雪ダルマ型の灯ろうを道の脇に置いて、雪を楽しむ発想の必要とそれを何年か実行していることを話した。伊香さんは新町商店街の活性化策として女性部がアップルパイコンテスト、鍋横綱コンテストを行い、まちに人を引き込む試み、“親雪”の方向にライフスタイルを変えていく話をした。長野県最北の飯山市からきた木村さんは青森と飯山の違いを話しつつ、どんどん新しく打ち出している飯山の観光イベントについて

話した。私は豪雪の新潟に駐在していた雪の経験、また田中角栄の雪との闘い方についてコメントした。

会場からは経済界OBから「親雪なんてきれいごとばかり言うのは現実的ではない」との意見、NPOの若者からは、「雪を邪魔者扱いせずに、雪とともに暮らすように自分たちのライフスタイルを変えることが必要ではないか」という意見があった。

[神崎]祭りの分科会では最初にねぶたの実際についての報告があった。今村さんが現在のねぶたは企業が参加する大型のねぶたと各地域 70 ほどが作り、子どもたちに引かせるねぶたの話をした。ねぶたを毎年作り続けるエネルギーは青森市の誇りであり、外部からもっと人を呼びたい。ただハネトが減少しているのが問題だ、と次の世代への伝承の危機に触れた。高杉さんは自分の地域のねぶたの実行委員会が高齢化し、若い人へのつなぎ



方の心配とともに、地域のねぶたの大事さを話した。地域のねぶたを観光資源としてみてほしくない、自分たちの地域資源として大事にしたいと話され感動した。獅子踊りの室谷さんは中国から伝来した獅子が京の都に伝わり、方角払い・悪霊払いとして普及し、それが北陸から津軽に伝わった高田の獅子踊りの位置づけを話した。私は全国の祭りを研究している関係で、獅子踊りの由来書をつくる必要性を話した。ねぶたについても同様の記述が必要だろう。

会場からも様々な意見や祭りの紹介があった。山下さんからはヨーロッパの祭りの紹介と女性の活力・アイデアの必要性、私は祭りの語源である神をまつこと、そして集うの意味の、まつらうを考えると、ねぶたは古い慣習にとられない都市の新しいタイプの祭りとして期待ができること、また、集まった後の飲食・なおらいの重要性を話した。

[野口]方言については伊奈かつ平さんのオープニングの話で十分準備が整って話に入ることができた。パネリストの皆さんの話の論点は、方言について「このまま自然に消えるものなら消えていいじゃないか」という姿勢を取るのか、それとも「頑張ろうと無理やり残すのか」に分かれた。大方の方言を残す活動などは研究したり学問的にやっているのに比べ、「津軽弁の日やるべし会」は、笑いの渦にみんなを巻き込みながら津軽弁を楽しみ、結果的に津軽弁を残す手法を取っていることに感服した。私は商店街や商店の活性化に携わっているか

ら、もっと商品の名前やイベント・PRに津軽弁を積極的に使った方がよいと思う。まち歩きガイドの話を知ると、市場でコテコテの津軽弁を引き出すと観光客がとても喜ぶと話していた。津軽弁には思わず引き込む力と魅力がある。

パネリストの石川さんからは津軽弁とドイツ語の共通性を採りあげて「ドイツでは小さな地域の言葉を大事にしている。それにならって津軽弁も大事にすべきだ」という話がでた。コーディネーターの篠田さんは「方言を無形重要文化財にし、その第一号を津軽弁にし、達者な津軽弁と話す人を人間国宝にする」とよい」と日ごろ言っている。この会合ではその意見は出なかったが、付け加えたい。

[増田]「じえじえじえ」が昨年の流行語大賞になったが、知事時代の12年間一度も聞いたことがない。それをよくぞ発掘してくれた、と感謝した。こういうことも方言・言葉が残っていく一つの手法になるのだろう。津軽の言葉はこの津軽で聞くと大変様になっており、いいたいことがわかる。鹿内市長に3分科会の報告を聞いた感想を伺いたい。

[鹿内]1945年の209cmの記録は降雪量の記録ではなく、積雪深の記録だ。青森の去年の最大の積雪深は153cmだった。青森市の場合積雪が100cmの場合に豪雪対策本部をつくり、150cmになると豪雪災害対策本部をつくる。豪雪の場合は市長が対策本部長になる。豪雪災害対策ができて、どうしても必要となったら、知事を通じて自衛隊に派遣の依頼をする。そういう現実はある。一方厳しさを受止めつつも、観光、スキー、スケート、食べ物、子どもの遊び、かまくら、産業、雪をエネルギーに変えるなど、いろいろなところに雪を活用している。

ねぶたは去年大きいものは22台、小さなものは60~80台出て、大小全部で百以上のねぶたが造られている。祭りに現れないものでも、幼稚園の子どもたちも作るし、各学校でもつくる。また県外でねぶたないしねぶた祭りをやっているのは40都市以上ある。首都圏では世田谷桜新町、千葉県柏市、茨城県つくば市、立川市がある。南は南九州市旧知覧町、長崎県五島列島、北は斜里町。昨年は中野区にも出た。なぜそんなにやるのかというと、住民が参加できることがある。笛、太鼓、ががしこがあり、誰でもなにかできる。春でも夏でも、昼でも、夜でもいつでもできる。しかも一人ではできない。それが受け継がれてきた理由ではないか。ラッセラーという津軽弁は、“いっぺえだせ”とかいう言葉が元だという説があるが、津軽弁で最も普及しているのが、ラッセラーではないか。

方言は俳優・ナレーターの牧良介さんが「津軽弁やるべし会」を伊奈かつべ

いさんとつくった。“そうじゃないでしょうか”という意味の津軽弁「たびよん」をつけたライブハウス「だびよん劇場」を作った。そこで講演や芝居をした。そこに青森そのものが凝縮していた。牧さんは亡くなられたが、いつも「このまちが嫌いだと出ていく人もいるが、こうしたら楽しいまちになる、好きなまちなる、住みたいまちになるということをやっていくと、ここがあずましいまちになる」言っていた。それを改めて紹介したい。

【休憩】

[増田] 全体会議の後半を始める。

青森市の 2010 年国調人口は 299,520 人。昨年 3 月、国立社会保障人口問題研究所が発表した 2040 年青森市人口予測は 205,405



人。この数字は甘く、実際にはもっと少なくなるだろう。私は 192,040 人とみている。数字は若年人口の東京流出を押しとどめられるかどうか、にかかっている。盛岡、秋田も似たようなもの。人口減の前提を冷静に受け止めるべきだろう。

雪は災害をもたらす一方、それをタネに観光振興の動きがある。しかし、やっかいな雪をすぐに利益をもたらすものに変えるのは難しい。さらに田中角栄的手法も効かない。ライフスタイルを変える方向で考えなければ解決にならないのではないか。早野さんはどう思うか。

[早野] 過疎地ばかりでなく、日本全体で人口が減る中でどうするか。成長経済がもう望めない。都知事選も同様なテーマになっている。行政力、財政力が限界になったときにどうしたらよいのか。やはり市民が頭を寄せ合って築いていくほかない。それがライフスタイルの転換の意味ではないか。ドカ雪が降ればその対策をしなくてはならないが、それだけでは間に合わない。雪の中でどうやって生きていくか。昨日の分科会で話された鍋横綱の試みや雪国幻想文学賞の話は、些細なことかもしれないが、そういうことを一つずつやっていくしかない。

神野先生は、モノへの欲求は豊かさにつながるが、存在の欲求は幸福につながるといわれたが、大変な雪の中で幸福を見つける以外にこれからの社会全体のあり方はないのではないか。

[増田]全国各地で、またこの青森で、女性たちの活動を支援している野口さんはどう考えるか。



[野口]かつて雪が厳しく降る中、商店街で 20 歳くらいのおしゃれ大好きそうな女性が雪べらで雪かきをしているところに出会った。こういう若い女性が青森を大好きで誇りに思い、青森から出ていかないようにするには、どうすればよいかとその姿を見ながら考えた。

私は各地で食べ物にこだわっているが、雪はすばらしい野菜をつくり、水をつくっている。それらを雪かき少女が自慢できる仕組みをつくってはどうか。それはモノを売るだけじゃなく、その背景のストーリーが大事。たとえば「ねぶたの時の美味しい食べ物は」と聞くと、「忙しくて食べてるところじゃないからおにぎりを食べる」とか。

ならばねぶたの時にしか食べられない“ねぶたむすび”をつくって売りだしてはどうか。「ね」「ぶ」「た」の素材をいれた三つのおにぎりセットをつくって、「ねぶたむすび」を握った娘は、それを食べた男性と結ばれるというストーリーをつくる。跳人のあとに「ねぶたむすび」で婚活という話もできる。それを若い人たちがプロジェクトをつくって考えてはどうか。そんなことが参画できること起きれば、若い女性が青森を面白がり愛するきっかけになるはずだ。全国 40 か所にねぶたがひろがっているというのだから、その地域ごとのねぶたむすびがあると面白い。雪に埋めた野菜が美味しい、水が美味しいだけじゃなく、それを地域外にわからせる物語が必要だ。

[増田]若い男女が青森市から出ていかないようにする重要な時期。神崎さんは伝統文化は崩さずにつなげる考え方と、自由に変化させる必要があるとの二つの考えかたを出したが、祭りの担い手はこれからどんどん少なくなる。全国に参加を呼び掛けると形は崩れるだろう。フロアーにいる祭り分科会コーディネーターの丸岡さんはどう考えるか。

[丸岡]今後人口が大幅に減っていく。それを想定して人口減社会をどうやって生き抜いていくか。その覚悟はわれわれにはまだできていない。そこにできるだけ早く思いを致してライフスタイルの変更をしなければならない。首長という仕事はいつでも様々な課題をどうやって攻めるかを考えている。その反面、守ることをやってこなかったと痛切に思う。守るべきは何かを考えると、祭り

は大きな要素で、それをいろいろな地域で考えていければよい。その意味で獅子踊りの由来などはすぐ作成する必要がある、それは住民の方々だけでは大変だろうから、市長さんからも知恵を出していただきたい。

[増田]ねぶたは都市型の大きな祭りとなってきた、同様な祭りをするところは40箇所が増え、自由な祭りにかわってきてしまったきらいがある。こういう変化は受け入れていかなければいけないのか。神崎さんはどう考えるか。

[神崎]もう現実にならなってきたので受け入れなければいけない。ねぶたがなぜ若い人に受けるかといえば、作る過程が共同で、踊り手としても参加できる。祭りの意義は精神の高揚や幸せ感の確認もあるが、そこに住んでいる安心感にあると考える。そのために知らない人とでも共同作業し、共同飲食をすることが大事。そうした祭りを村社会はつくってきた。しかし都市ではまだ成熟しておらず、共同制作だけとか、共同飲食だけのアンバランスな祭りが多い。

人口減社会では共同制作の人手が足りなくなる。その原因として年齢階梯をおろそかにしたことがある。長老、中壮年、青年の各層がいて祭りの作業が分担される。それが長い間に無視された。特に青年層がいない。これには大学生の参加が方法としてある。祇園山笠が京都の大学生を引き手に募集した。そこまでするかしないかはその祭りの地域の判断。私は岡山の神主の出。田舎と年間20往復し、その中で祭りにも関わってきたが、もう私の代限り。一人二人が残っても無理で、若者層をどう補充するかが課題だ。

[増田]どうしても人手が足りなくなったら、思い切って外部の大学生を入れて維持するかということも重要なポイントだということ。方言はどうか。野口さんはこれからもっと津軽弁を積極的に広めていくのがよいか、青森に来た人たちに味わってもらえばよいのか、どう思うか。

[野口]祭りも同じだが、残そうと思ってやったことはうまくいかない。津軽弁は残そうとしなくてもよいし、広がらなくてもよい。しかし津軽弁を使うことが好きな人が、津軽弁を強烈に愛することが大事だ。広がらないで、ギュッと濃くなってほしい。濃ければ強烈なインパクトを与える。日本中にそれぞれの言葉を愛する人がいることがスローライフだと考える。ここに6人いれば6つの言葉がある、そういう多様なことを認めるのがスローライフなはずだ。

最近では方言が面白いと方言ナビや方言で歌う歌が流行っていて、これはチャンス。濃いインパクトを持たせた方言で名づけた土産物が出てもいい。方言で会話するスナックがあると、客が来る。それは地元で意図的にやらなければな

らない。方言に浸りきる津軽弁ツーリズムがあってよい。読んでもわからないくらいの津軽弁パンフレットがあってもよい。そういう着地型の地域観光を地元の若い人たちが面白がってつくる。それをよそものがお手伝いする。そして心地よい旅が出来上がる。それはウケます。そういう仕組みを考えたい。

[増田] 私がいた岩手でも地吹雪ツアーが人気があった。どっぴりと濃いものは人気が出るし、価値がある。

[野口] それを外から来た人が評価して地元の自信が生まれる。

[増田] 最後に地元のまちづくりのヒントなることを一言ずつお願いする。



[早野] 青森に来るに際して、太宰治の『津軽』と司馬遼太郎の『北のまほろば』を読んだ。『津軽』は若い時にも呼んだが、いまはしみじみと感ずるところがあったし、青森は本当に北のまほろばだと思う。これからはハードを市役所にやってもらうことに一所懸命になるのではなくて、自分たちでとにかくやってみる。そういうことに切り替わって行く時代だと思った。

[神崎] 東京ほか大都市に県や市のアンテナショップがある時代だが、そこで有形のモノを売る時代ではない。無形の文化を売る時代だ。せめて歓迎の言葉を一言、「いらっしやいませ」ではなく自分の地域の方言でお客様を迎える。その成功例として沖縄のめんそーれがある。歓迎と別れのことばを方言でやる。それだけで、意義がある。

[野口] 日本における青森市の役割は何なのかを市民にもっと考えてほしい。ねぶたという祭りを持ち、津軽弁を持ち、雪が降る。この青森からどういことを訴えるのが日本にとっていいのかの視点で考えてほしい。日本がどこに向かうのか不透明でわからないときに、ねぶたで汗をかくことがこんなに楽しく、マイナスの雪を「親雪」に変えられるのだということを伝え、自分たちの方言を自信をもって語り、青森が力強く、日本がフワフワ飛んでいかないように、押さえてほしい。

[神野]室生犀星の詩がトラウマになってはだめだといつも言っている。“ふるさとは遠くにありて思うもの”ではなく、“ふるさとは近くにあるもので、愛するもの”だとスエーデンの民話では教える。そのためには人口減少という現象が起こったとしても、今あるものを破壊して新しいものをつくるのではなく、今あるものから新しいものを発見して作っていくことだと思う。

大げさにいえば人類の歴史ですべてのことは行き詰っているから、その困難を乗り越えるところから次の仕事は創り出される。北欧で新しい産業がいま次々と生み出されているのは、自然環境が厳しいから。北欧は雪どころではなく、氷だ。いまあるものを逆転の発想で新しい価値に変えていくことが重要だ。

[増田]最後に市長さんどうぞ。



[鹿内]野口さんがいった津軽弁ツアー、今週土曜日から始め、毎月やる。前売り券は売り切れた。津軽弁だけでなく、津軽三味線、手踊り、民謡など津軽を全部やる。人口が減り、ねぶたも津軽弁も雪も大変だと言いつつ、市民の力でそれぞれの時代時代を乗り越えてきた。だから楽観的に考えている。

青森の人はタフだしエネルギーが豊富。無口でもない。世田谷の桜新町でねぶたをやっているときは、そこで津軽弁も聞けるし、リンゴや津軽の食べ物も食べられる。そんなねぶたをやっている町が全国に40ある。青森に会えるまちが全国に40ある。そこから面白いことが広がっていくのではないかと考えている。

[増田]これで全体会を閉じさせていただきます。ありがとうございました。



4) 逸村逸品展・市民活動展

- ・日 時：1月25日（土）・26日（日）9時～17時
- ・会 場：「ねぶたの家 ワ・ラッセ」2階
- ・来場者：161人（25日72人・26日89人）

・内 容：

青森市の市民が、地域資源を活かして新しい地域の顔となる商品を開発していく参考になるべく、全国47都道府県から集めた、スローライフ時代の逸品を100アイテム展示した。理論ではなく、モノから伝わる、まちおこし・スローライフはわかりやすいものとなった。



両日とも、どの時間帯もまんべんなく来場者があり、一人ずつの滞在時間が長かった。質問が多かったものでは、年配者から「アルカサル」（根曲竹の杖）について。子どもから「てるぺん」「だれがどすた」「もくねんさん」「クラフトウ

ェハース」「サヌカイトチャーム」など。女性からは「川巾うどん」「発芽玄米パスタ」「座敷箒」「やさしいたわし」。その他、観光業務関係の方が、「鹿児島島の3Dポストカード」など。※展示品一覧リスト参照



市民活動展についても、展示場所が会場の奥だったために少しわかりずらかったが、

じっくりと見ている人が目立った。

「逸品展」「活動展」ともに、地元市民グループがこの2日間は他の催しと重なり、来場したかったができなかったとの感想もあった。



3 交流会・視察

1) 交流会

- ・日 時：1月25日（土）18時30分～20時
- ・会 場：「青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸」
2階多目的ホール
- ・参加者：83人
- ・参加費：4000円
- ・内 容：

もと機関長の案内で船内見学後、交流会（夜なべ談義）。山海の幸が並ぶお弁当、“鍋横綱”2種、けの汁、おにぎりなど、青森ならではの味、お酒での交流となった。なかでも、幻のアップルパイや鍋が好評だった。

席はくじ引きで決め、様々な人が交流することとなった。途中、「ねぶた囃子」や「跳人」の踊りの披露があり、市外からの参加者も踊り、印象深い時間となった。ちょうど開催中の「灯りと紙のページェント」や駅前の「あおもり雪灯りまつり」など、交流会前後に鑑賞することができた。





2) まちなか視察

オープニング前と全体会議終了後、主に市外からの参加者対象にまちなか視察が行われた。「あおもり街てくガイド」「しんまち商店街女性部」が案内役で活躍した。市外者からは「青森の素顔と市民に直接触れられてうれしかった」「青森にまた来たいところから思った」などの感想がでた。雪の中の商店街歩きでは、買い物をする人も多かった。

●1月25日(土)参加者：32人、コース：「ワ・ラッセ」→リンゴ屋→にこにこ通り→古川市場・「のっけ井」など。

●1月26日(日)参加者：26人、コース：しんまち商店街



4 あずましい青森まちづくり

——スローライフ学会から

「スローライフ・フォーラム in 青森」は、分科会、全体会議を通じて、三つの特色をもち、それによって期待した成果をあげた、と見たい。

第一に、青森市の未来像について、積極的な評価をまとめたこと。雪、祭り、方言を中心としたまちづくりのための地域資源をどう活かしていくか。

- ・ライフスタイルを変えるのではなく、長年培ったものを開花させていく。
- ・しかし、静的でなく体験型のブランドをつくりだす。
- ・雪、まつり、方言、それぞれの分野で、ふさわしい物語を考えていくべきだ。などがあげられた。

とくに「祭り」の分野で、ねぶた、獅子踊りが、ともに神仏たよりでなく、宗教を離れて市民のエネルギーの発散から育った点が評価された。そこから歴史・物語をつきつめ、それを明らかにしていくことが協調された。

しかも、青森のポジションは他の地域より高い、との見方が大勢を占めた。日本にとって青森は何ができるか、何を発信できるか、大きな視点に立つべきだ、との意見があった。これは基調講演の結語で述べられた

——青森は、司馬遼太郎の「北のまほろば」より、さらに進め「国のまほろば」に——という考えと帰を一にしている。

第二に、具体的な提言もいくつか。

- ・ねぶた、獅子踊りなどについて、まつりの歴史、由来書などを早くまとめるべきだ。
- ・青森の祭りは、「市民が共同してつくりあげたと」いう意義が大きい、「共同で食べる、飲む」ことにも力を入れてほしい。
- ・「青森の食」（別の視点からも）をプレイアップしていくべきだ。ねぶたに特有の食べもの、たとえば「ねぶたおむすび」をつくりだすこと。
- ・津軽弁の強烈な印象をPRに活用すべきで、おみやげとか宣伝カーとか津軽弁をもっともっと——。
- ・雪については、邪魔もの意識をあらためていくとともに、「克雪」から「親雪」への段階に来ている。「新たななる公共精神」が強調された。
- ・全国に展開される40の「ねぶたの会」を交流の場として活用していく。

「雪」での具体的な提案として「雪の青森、和傘がよく似合う」を付け加え

たい。この季節の青森は、「灯りと紙のページェント」が行われ、「雪だるま〜る」もはなやかだ。雪の青森へいらっしやい、の呼びかけに、「傘は持たずにどうぞ」と。ねぶた模様の和傘を用意、市内いたるところに傘立てをつくっておき、自由に使用してくださいという趣向である。

第三に、フォーラムの展開が、二つの点で特色をもった。まず、フォーラムは三つの分科会をベースに全体会議でさらに論議をつきつめた。同時に、そのスローライフを逸品という形であらわした「逸村逸品展」を開催、青森市の「市民活動展」も並行して開き、ふくらみをもたせた。

またオープニング・イベントを「カダールフェスタ」とともに行うとか、「交流会」も地元と外からの客が分けへだてなくにぎやかにとか、重層的なスローライフの催しとなった。

さらに、青森市サイドの取り組み。実行委員会は、事務局を担当した市民協働推進課の職員と市民代表の熱烈な活動があり、それが外との交流にすばらしい波をつくった。

外からの参加は全体で約 50 人に達したが、フォーラム前後の「まちなか視察」は、それぞれ周到なプランと熱心なガイドによって外来者からの感謝と評価は高かった。

青森市の百人委員会を中心とした「公民協働」はかねて定評のあるところだが、今回は外からのお客さまと市民が和やかに語り合う「客民協和」の場をつくりだしていた、といえるのだろう。



.....

NPOスローライフ・ジャパン
〒160-0002 東京都新宿区坂町 21 リカビル 301
電話 03-5312-4141 F A X 03-5312-4554
E-Mail/ slowlifej@nifty.com
2014年2月7日